

## 『ベレニス』における個（下）

安 藤 隆 之

## Ⅱ 作者の主張

『『ベレニス』における個』（上）〔教養論叢第17巻第1号 p. 129—p. 145〕において、主要登場人物がどのような論理をたどり最終的態度を決定したかを明らかにした。では作者ラシーヌはこの作品で何が言いたかったのか。それはかれがティテュスとベレニスのどの態度を肯定的にあるいは否定的に描写しているかによってわかる。

まず作品構成の軸というべきティテュスからはじめよう。かれは二者択一を迫られていた。前記論文末に示した図式に従えば「欲望」《désir》をとるか「名誉」《gloire》をとるか。別な表現を使えば、「おのが運命の主」《maître de mon destin》でありつづけるかローマの「法」《loi》そのものというべき「皇帝」《empereur》になるのか。かれは後者がとるべき道だと考える。なぜならそれはなによりも絶対的存在である「神の選択」《le choix des Dieux》だからである。かれはいう：

Je connus ....

.....

... que le choix des Dieux, contraire à mes amours,  
Livrait à l'univers le reste de mes jours.

（Acte II scène 2）

わたしはさとした……

神々はわたしの愛に反対され、  
こののち世界に身を捧げよと命じておられる。

（第2幕第2場）

しかしかれは神の命令の道理をなにも考えず後者の道を選ぶのではない。かれはいう：

Rome observe aujourd'hui ma conduite nouvelle.  
 Quelle honte pour moi, quel présage pour elle,  
 Si dès le premier pas, renversant tous ses droits,  
 Je fondais mon bonheur sur le débris des lois!

(Acte II scène 2)

ローマは今私のつぎの行動を見守っている。  
 私には何という不名誉であり、ローマには何という前兆であろう、  
 もしはじめからその権利をすべて踏みにじり、  
 がれきと化した法の上におのが幸福を築くとしたら！

(第2幕第2場)

もしローマの「法」《loi》が正しいものならこれを犯すことは罪である。かれがそれを「不名誉」《honte》と考えるのも当然であろう。ベレニスにめぐり逢って「名誉」《gloire》のすばらしさを心から知ったティテュスである〔『ベレニス』における個〕(上) p.132 〔引用参照〕。「法」《loi》の司人「皇帝」《empereur》として生きることを選んでも不思議はない。そこには一定の道理がある。しかしかれの「幸福」《bonheur》を拒絶するこの「法」《loi》ははたして正しいのか。ティテュスは父ヴェスパジアン帝が亡くなるまで「欲望」《désir》を行動規範として生きていた。そこにはなんの濁りもなかった。かれは「深い安らぎの中」《dans une paix profonde》にいたのである。だからもし自分がローマ皇帝になる日が来たら異国の女王を皇后にすることを禁止するローマの法律にもかかわらず愛するベレニスを皇后として迎えることにためらいはなかった。しかし父の死に際し神の声を聞き突如として考えを変えたのである〔前記論文 p.133 参照〕。かれはいう：

Rutile : Seigneur, tous les tribuns, les consuls, le sénat  
 Viennent vous demander au nom de tout l'Etat.  
 .....

Titus : Je vous entends, grands Dieux. Vous voulez  
 rassurer

Ce coeur que vous voyez tout prêt à s'égarer.

(Acte IV scène 8)

リュティル：陛下。護民官，執政官，元老院の全員が  
全帝国の名のもとに謁見を願って来ております。  
.....

ティテュス：大いなる神々よ，わかっております。  
道を失いやすきこの心を支えようとしてくださる。  
(第4幕第8場)

かれは今や突如としてローマ帝国の法秩序を神の使者と呼ぶ。なぜか。結論からいえば合理的な理由はない。しいて探せば，ローマの法はかれが生まれる以前から長く存在している。かれが幼年の時にもそして今も人々はそれを正しいと主張する。また歴代の皇帝も異国の女王を皇后とすることだけはしなかった〔これについては第2幕第2場ポーランの説明また第4幕第4場ティテュスの説明を参照〕。この伝統の重みだけが唯一の理由らしきものである。しかし「法」《loi》の正しさはそれが長く君臨したことによって証明されるわけでも合理化されるわけでもない。かれはその「法」《loi》が正当なものである理由をどこにも述べていない。ではなぜこれを選ぶのか。それはかれがローマの「法」《loi》をただ主観的に、あるいは勝手に神＝正義と判断したからである。その是非も問わず合理的根拠もなく自明の真実だと突如として思ったからである。

さて主観的であろうが非合理的であろうがかれの下した判断は結果を伴う。ベレニスとの別れである。かれは心がベレニスへと傾くことを「道を失う」《s'égarer》と表現する。思い出していただきたい。かれはベレニスに会う以前の生活を振り返って何といったか。

Ma jeunesse, nourrie à la cour de Néron,  
S'égarait, cher Paulin, par l'exemple abusée,

.....

(Acte II scène 2)

わが若き日々はネロンの宮廷で育てられ、  
 悪しき手本にまどわされ、ポーランよ、道を失っていた、  
 ……

(第2幕第2場)〔下線は論者〕

かれは「道を失っていた」《s'égarer》という表現を使っている。これはベレニスへ心が傾くことをいわば「悪しき手本にまどわされる」ことと同じように考えていることを示唆している。事実別のところでかれはいう：

Hélas ! vous pouvez tout, Madame. Demeurez :  
 Je n'y résiste point. ...

……

……

Que dis-je ? En ce moment mon cœur, hors de lui-même,  
 S'oublie, et se souvient seulement qu'il vous aime.

(Acte IV scène 5)

ああ！ 女王よ、お望みのままにされよ。とどまれるがよい、  
 反対などいたしませぬ。……

……

……

何を口走っているのだろう。今この心は、理性を失い、  
 われを忘れ、あなたを愛していることのみを思い出している。

(第4幕第5場)

ティテュスはローマの法のことを忘れベレニスへの愛を思い出している自分を「理性を失っている」「逆上している」《hors de lui-même》という。かれはまたベレニスへの思いに引きずられる自分についていう：

L'excès de la douleur accable mes esprits,

(Acte IV scène 6)

あまりの苦しみが理性を乱す、

(第4幕第6場)

これはベレニスへの愛を選ぶことを理性的に考えてあやまりであるとしている証左である。しかし一方、ローマの法をその正当さを合理的に証明もしないで受け入れることも反理性的であり不条理というべきではないのか。ティテュス自身はどう考えているか。ティテュスはいう。

Titus : Et je vais lui parler pour la dernière fois.

Paulin : Je n'attendais pas moins de cet amour de gloire

.....

.....

Titus : Ah ! que sous de beaux noms cette gloire est  
cruelle !

(Acte II scène 2)

ティテュス：そしてあの人に話すのもこれが最後。

ポーラン：その名誉への愛を信じておりました。

.....

ティテュス：ああ！ この名誉はその美しき名のもとになんと  
残酷なことだろう！

(第2幕第2場)

かれは神の命令、具体的にはローマの法にしたがってベレニスと別れることを「名誉」《gloire》だと考えている。しかし他方ではこの至高の行動規範というべきものを「残酷」《cruelle》と心の底から形容するのである。似たような言葉はしばしば見られる。第4幕でいよいよベレニスと向い合って決心を告白するに先だち、かれは自身に向っていう：

Ton coeur te promet-il assez de cruauté?

(Acte IV scène 4)

お前の心はそれだけの無情さを持ちえるか。

(第4幕第4場)

さらに決定的なことがある〔これは前記論文の134ページから136ページの部分と内容的に重複する点が多いのでそこを参照していただきたい〕。

ティテュスは、「欲望」《désir》ではなく「名誉」《gloire》を取る。  
それはかれにとってどんな意味があるのか。かれはいう：

Je connus que ...

Il fallait, ...renoncer à moi-même ;

(Acte II scène 2)

私はさとした、……

自分自身を放棄せねばならない；

(第2幕第2場)

この引用文での「自分自身」《moi-même》とは前記論文 (p. 132 – p. 134) で示したように、「欲望」《désir》を要素とする主体のことである。これを放棄することは、ティテュスの言葉「もはや生きることが問題なのではない」《il ne s'agit plus de vivre》が示すように、死、少なくとも生きた屍になることを意味する。かれは自分の主体の実体というべきものを否定して生きることが正しいと考える。そして実際かれはその考えにしたがって最終的態度を決定し実行したのである。

この事態、つまり価値あるものを否定して合理的根拠のない神の道に行くというパラドクサルなティテュスの行為をどう理解すればよいのか。作者ラシーヌはどう判断しているのか。

同じような疑問はベレニスにも起きる。ベレニスにとって人生とはティテュスへの愛を生きることである。前記論文でも示したように、実際彼女の関心は愛だけである。彼女はいう：

Au plaisir de vous voir mon âme accoutumée

Ne vit plus que pour vous. ...

(Acte IV scène 5)

この心はあなたにお会いする喜びになれ

もはやあなたのためにのみ生きております。……

(第4幕第5場)

それはティテュスも認めるところである。かれはいう：

Je connais Bérénice, et ne sais que trop bien  
Que son coeur n'a jamais demandé que le mien.

(Acte II scène 2)

わたしはベレニスを知っている、わかりすぎるほどに、  
あの人はわたしの心のみを求めた。

(第2幕第2場)

このように愛のことしか眼中にないベレニスであるから、またティテュスも彼女を心から愛しその証としてローマ皇后の称号を与えようとしていたことを知っていたベレニスであるから〔この間の経緯については前記論文 p. 130—p. 132 を参照〕、ティテュスが突如としてローマの法にしたがい別れねばならないといったとき、彼女には心変わりが原因としか思えなかった。彼女はいう：

... Hélas! je me suis crue aimée.

(Acte IV scène 5)

…ああ！ 愛されているものとばかり思ってきました。

(第4幕第5場)

彼女はティテュスの悩みを知らない。愛がすべての彼女は愛するか否かの次元でしか考えないので、かれが内発的な欲求にしたがって生きるか、神が正しいと示し（かれは勝手にそう思ったのだが）かれの主体にとっては外的な規範つまりローマ法にしたがって生きるかの択一の前に立たされていることを理解できない。生き方において後者の道があるとは思ってもよらないのである。内発的な心情から愛したり嫌ったりすることそれ自体を放棄するか否かが問題として生まれえないのである。ティテュスから見ると彼女はこの点において盲目である。しかしその彼女もかれが第5幕第6場で行なう「真の告白」《un aveu véritable》によって、前者の次元においてかれはいまも愛していることを知る。彼女はいう：

Je connais mon erreur, et vous m'aimez toujours.

(Acte V scène dernière)

まちがっておりました，あなたはいまも愛してくださる。

(第5幕最終場)

そして同時にティテュスが直面していた二者択一の存在も知り，かれと同じく突如として前者の道を放棄するのである。愛がすべての彼女がそれを放棄したらあとに何が残るのか。彼女自身の解決法を聞こう。

Votre coeur s'est troublé, ...

Bérénice, Seigneur, ne vaut point tant d'alarmes ;

Ni que par votre amour l'univers malheureux,

.....

.....

Se voie en un moment enlever ses délices (=les délices de  
vos vertus)

Je crois, depuis cinq ans jusqu'à ce dernier jour,

Vous avoir assuré d'un véritable amour.

Ce n'est pas tout : je veux, en ce moment funeste,

Par un dernier effort couronner tout le reste.

Je vivrai, je suivrai vos ordres absolus.

Adieu, Seigneur, réglez : je ne vous verrai plus.

(Acte V scène dernière)

あなたは苦しまれた。.....

ベレニスは，陛下，それほどの御心痛には値しません。

またベレニスへの愛のために世界が不幸にも

.....

.....

(御徳政の) 享受をいつときたりとも奪われるには及びません。

私は今日この日にいたる5年間，

真実の愛を捧げてきたと信じています。

それだけではありません：この悲しみの時に，



最後の力をふりしほりその愛をつらぬきたいのです。

私は生きぬきます、あなたの絶対の御命令にしたがいます。

さようなら、陛下。もうお会いすることはないでしょう。

（第5幕最終場）〔（ ）は論者〕

彼女は今、世界（ニローマ）の幸福と自身の幸福が両立しないものと考え、前者が後者より優先権をもつと考える。しかしティテュスに徳政の大切さを教えたのは彼女である。かれが皇帝となってもそれを続ければよいではないか。別れる道理はない。それなのに彼女は別れの「命令」《ordres》を「絶対の」《absolus》と形容し、これを受け入れる。なぜか。それはティテュスの場合と同じである。自分の実体をなす愛にしたがうのではなく、外的な規範、つまりティテュスが説くローマの秩序にしたがうことを是非を問わず正しいと思いこれを受容したということなのだ。彼女はそうすることによって自分の「真の愛」《un véritable amour》を昇華させたと考える。しかしそれは主観的なものでありこの昇華は止揚《auheben》ではない。自己の実体の放棄がどうして止揚になりえよう。だからこそ彼女は自分の愛を次のように表現する。

*l'amour la plus tendre et la plus malheureuse*

（Acte V scène dernière）

もっともやさしくもっとも不幸な愛

（第5幕最終場）

一体これはどういうことなのか。ティテュスもベレニスも価値あるものを否定して合理的根拠のない道を選ぶという。作者はこの2人をどう考えているのか。これはわたしたちの最初の質問であった。かれの考えは作品そのものの枠内だけでは理解できないのである。ではどうするか。作品を作者ラシーヌが生きた17世紀フランスに置いてみることである。

### Ⅲ 作品の意味

ティテュスとベレニスが直面した問題、あるいはラシーヌがこの作品において取り組んだ問題、それは「Ⅰ．作品分析」と「Ⅱ．作者の主張」が

示したように、主体にとって内的な行動規範が大切なのか外的なそれが大切なのかという問題である。作者が2人の登場人物にとらせた行動は、前者を放棄し後者に従うというものだった。しかもこの2人をしてそれは不幸であるといわしめつつであった。こうした行動の意味あるいは謎は17世紀フランスの歴史情勢を考えなければつかめない。

主体が内的規範と外的なその二者択一を迫られるのは、歴史的には封建的共同体社会が近代ブルジョワ社会へ移行する時期である。封建的共同体社会が資本主義的生産諸関係の成長によって解体する過程で、村落共同体や都市のギルド的共同体あるいは封建的共同体としての「家」に精神的基盤＝主体性を置いていた人間たちは、自分自身を「一個の独立した主体」「個」として自覚していく。芸術家が中世末期から作品に自分の名をしるすようになるのは、その一例といえるだろう。

さて、「個」が歴史の表舞台に登場してくると、その存在の是非をめぐる大きな思想闘争が生まれる。一方では、封建的秩序の崩壊を恐れる者がこの「個」に共同体への回帰を強要し、「個」にとって外的な共同体的規範の甘受を強いる。他方では、封建的制約から解放を望む者が「個」の出現を不可逆的なものと見なし、その自立を助長するような新しいモラルをさし示す。ラシーヌが生まれ育ち、『ベレニス』が書かれた17世紀フランスはまさにこうした時代だった。

17世紀に先立つ時代、ルネサンスあるいは宗教戦争の時代ともいわれる16世紀は、封建制が根底から揺り動かされた時代である。その意味で近代のあけぼのと言われる。しかし、封建領主制の屋台骨を揺振った農民とそこから不断に分離してくる新興ブルジョワ諸階層の反封建的エネルギーは、封建制の最後で最高の形態＝絶対王政の枠内へ吸収されてしまう。もちろんこれら反封建勢力は、一時的な停滞・退潮を見ることがあっても大局的には増大し続ける。だから絶対王政はたえず体制の強化を図らねばならない。宗教改革運動に呼応して登場した反宗教改革運動はその一つの現れである。17世紀前半、ベリユル、フランソワ・ド・サル、ヴェンサン・ド・ボール、サン・シランらの反宗教改革派の人々が取り組んだ問題はい

うまでもなくローマ教会の権威の復活である。いったん離れてしまった人心を再びローマ教会の翼下に集めるには、バルテルミィの血の弾圧や武力による脅迫では追いつかない。客観的情勢は、トマス・アキナスの時代とは大きく変わってしまった。教会の教義を新時代にマッチしたものになくなくてはならなかった。そこから幾多の新しい理論が生まれ、論争がくり広げられることになる。その際、大きなテーマは、今や歴史的事実となってしまった「個」の出現にどう対処するかである。宗教的次元では、これは人間本性の墮落の問題として、ジャン・カルヴァンからイグナス・ド・ロヨラまでさまざまな宗教活動家によって取りあげられている。

絶対王政は、もちろん政治的分野でも封建的秩序の再建と再編をつづけなくてはならない。「個」の出現は共同体的秩序の崩壊と裏腹の関係にある。したがってかれらは、都市においても農村においても封建的共同体の強化に乗りだす。たとえば、全国的な規模での封建的ギルド制が、1669年の一般規制、1665年～1672年とくに1673年のギルド勅令によって施行強化されている〔この点については中木康夫著『フランス絶対王制の構造』とくに p. 277—p. 290 参照。また Orest Ranum の ≪Les Parisiens du XVII<sup>e</sup> siècle≫、とくにその p. 136—p. 202 参照〕。

「個」と封建的共同体秩序の問題は、政治や宗教の分野だけでなく文学の分野でもあらわれる。コルネイユの『ル・シッド』は、2つの「家」の対立下の恋を題材にしている。ディエグ家のロドリグとゴメス家のシメーンは愛し合っている。ある日、ドン・ディエグがドン・ゴメスから侮辱を受ける。ロドリグは「家」の名誉という共同体的行動規範からシメーンの父ドン・ゴメスと闘いこれを倒す。ドン・ゴメスが死ねば、2人の愛に支障をきたすことは当然予想されるはずである。しかし名誉回復は、疑う余地のない絶対的命令であった。ロドリグにはそう思えたのである。これは、共同体的規範が当時社会的権威をもっていたこと、また同時にそれがために悲劇が生まれることが題材にもなる時代であったことを示している。モリエールの『守銭奴』では、アルパゴンが子供の結婚に絶対的権威をもっている。これは当時の家父長的家族制度を背景にしている。しか

しモリエールは、家父長の權威を笑いものにしている。かれは、かつてラブレーがしたように、伝統的秩序の理不尽さをコメディの対象にし、自主的に生きようとするブルジョワジーの新しい生き方を謳歌したのである。

以上のように、17世紀はあらゆる局面で「個」と封建的秩序の関係が問題化している。ラシーヌはこの時代に生きるかぎり、どういう立場からであれこの問題に一定の態度をとらないわけにはいかない。これが『ベレニス』誕生の歴史的背景として存在している。ではラシーヌはいかなる態度をとったのか。

かれは当時の社会のどんな階層に属していたか。それはすでにホール・メナール、サント・ブーヴ、レイモン・ピカール、ジャン・オルシバルらの諸先学の研究によってわかっている。かれは法服貴族〈gens de robe〉と呼ばれた階層の末端に属する家柄の出身である。ここでかれの伝記をくり返す必要はないであろう。まして法服貴族としての栄達の道を歩みきったラシーヌを見事に浮きぼりにしてくれたレイモン・ピカール教授の論文《La carrière de Jean Racine》があるからである。問題はかれの属する階層が当時の社会においてどんな役割を果たしたのか。そしてこれに属するラシーヌ自身はどう行動し、どう判断したかである。『ベレニス』に戻ろう。テイテュスとベレニスが最終的にとった態度はなんであったか。かれらは自分を一個の独立した主体として確立し自己の内在的規範にしたがって行動することを放棄し、主体にとって外的な要請にしたがうことを是とした。なぜか。作者ラシーヌが絶対王政という封建制の最高で最後の形態の支持者だからである。これは法服貴族の態度であった。支持の仕方は歴史家によって見解が分れる。ソヴェトのボーリス・ホルシュネフはその著《Les soulèvements populaires en France de 1623 à 1964》で、この階層を（マルクス主義的意味の）ブルジョワジーでありながらそのブルジョワ的性格を喪失し、いわば体制内化していった階層であるという。中木康夫はその著『フランス絶対王制の構造』の中で、この階層を封建制の最高のそして最後の形態としての絶対王政の主体的支持勢力であったという。両者が共通している点は、この階層が絶対王政体制の支持者である

という点である。今のところわたしたちにはそれで十分だ。ティテュスとベレニスのとった態度の意味がこれで判明した。とくにティテュスの力のこもった次の言葉の重みがわかったのである。

Ma gloire inexorable à tout heure me suit ;

(Acte V scène 6)

仮借なき名誉の道が片時も私を離さないのだ：

(第5幕第6場)

かれらは「個」を封建的共同体秩序に回帰させる立場をとったということなのだ。しかしながら大きな問題が残っている。ティテュスとベレニスはでは自分たちのとった態度をなぜ不幸と言うのか。ここに作家としてのラシーヌの偉大さがある。かれは自己の内在的規範を放棄することの非合理性を見事に描出したのである。これは一種の批判的リアリズムの手法といてよい。批判的リアリズムは資本主義社会の人間生活を批判的に形象化することだけをいうべきではない。本論に戻ろう。ラシーヌが、すでに歴史的な既成事実となってしまった「個」の出現を一方で否定しながら他方で肯定的に見る傾向があるのはなぜか。どこからその力が生じてくるのか。1つは、封建社会の底辺での封建的共同体秩序の解体が進行すると、それは上部へと波及せざるをえないという事実がある。2つにはかれの属する法服貴族階層の果す歴史的役割から来ているであろう。これ以上の分析は今の私の力では困難であり、また本論の枠を越えるのでこれ以上述べない。ただ「美しさ、輝かしさ、美徳」《Beauté, gloire, vertu,》を備えるベレニス像に16世紀フランス・ルネサンス美学の流れを感じとることができ、またそこには芸術を神の道具ではなく人間の道具とするルネサンスの伝統が脈打っている。そしてラシーヌがその継承者の一人であることは確かであろう。

#### Ⅳ 結語：先学からの継承点と先学との不一致点

このささやかな研究は、ポール・メナール、レイモン・ピカールら諸先

学の研究成果なくしてありえないことは言うまでもない。しかし私の念頭にあるのは故ルシアン・ゴールドマン教授の研究である。私は『隠れた神』*«Le Dieu caché»* に敬服しつつもなにか一つ納得のいかない気がしていた。過去においてささやかな反論を試みたがそれはとるに足りないものであった。しかし今回の研究発表でゴールドマン氏との見解の相違がはっきりしたと思う。かれの『ベレニス』分析はどういうものであったか。かれは作品分析に先立ち3つのカテゴリーを示している：「神」「人間」「世界」(＝現実世界)。ティテュスとベレニスはこの「人間」の範疇に属し、アンティオキュスは「世界」に属し、ローマあるいはそれと等価値として使用されている元老院とか神々そのものは「神」に属している。そして「人間」は「神」と「世界」に引き裂かれている悲劇的存在である。『ベレニス』では、「人間」であるティテュスが「神」＝価値の要求、つまりローマへ忠誠をつくすこととベレニスへの愛に応じるという2重の要求を実現できず、かといってアンティオキュスの属する「世界」＝無価値にしたがうことはしたくない。かれはその両者の間でどちらにもつけない悲劇的人間であると、ゴールドマンは分析する。そして「人間」とは歴史的には法服ブルジョワジーのことであり、かれらは封建制を足枷とする人間でありながら封建的絶対王政に官職としてつかえる身であるためこれを否定するわけにはいかない立場にある。かれら「人間」にとって「世界」とはこの絶対王政という現実であり、「神」とはかれらが本来実現をめざすブルジョワ社会の別名のことであり、ゴールドマンはいう。しかし私がこの研究発表によって明らかにしたようにゴールドマンのいう「神」とは、かれの主張とは逆に封建的共同体秩序の別名であり、人間を一個の独立した主体とすることを許さない神なのだ。故ゴールドマン教授の『隠れた神』は、スケールの大きなものであり、今の私の力ではその全体的検討はできないが、この点においてかれは誤っているといわねばならない。またティテュスが直面したローマへの忠誠とベレニスへの愛を「神」の2重のつまり実現不可能の要求と分析するのもあやまりである。本論文で明らかにしたようにティテュスの直面したものは、封建的秩序の維持がこれを根底から堀

り崩していく「個」の容認かの択一であるのだ。つまりゴールドマン流の論法からいえば後者のみが「神」の要求であり、法服階層が実現しようとしてできずにいるところの課題なのだ。

最後にこの研究論文を書くにあたり、フランツ・ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』からさまざまな示唆を受けたことをつけ加えておきたい。なお本論文は、1975年秋日本フランス語フランス文学会秋季大会にて発表した『『ペレニス』における個概念』を、多くの先学からの批判を誠実に受けとめ、論文構成を含め推敲し（上）（下）にわけて発表したものである。諸先学同僚からの御批判を待つしだいです。また近いうちに『『ペレニス』におけるヤンセン主義的リゴリズムの問題』を発表する予定です。前記学会発表論文においてジャンセニスムの問題も触れましたのでこれは私の義務と考えています。

1977年3月

### BIBLIOGRAPHIE

- i) テキストはほぼ全面的に Raymond Picard 教授編纂の *Oeuvres complètes de Racine, en 2 vols., Bibliothèque de Pléiade, 1969* を使用した。
- ii) 主要参考文献
  - Picard (Raymond), *La carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1961.
  - Mesnard (Paul), *Oeuvres de Jean Racine, en 10 vols., Hachette, 1865-1873.*
  - Goldmann (Lucien), *Le Dieu caché*, Gallimard, 1969.
  - Borkenau (Franz), *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild*, Paris (Félix Alcan), 1934. 邦訳 水田洋訳者代表『封建的世界像から市民的世界像へ』, みすず書房, 1969年。
  - 中木康夫『フランス絶対王制の構造』, 未来社, 1963年。
  - Porchenev (Boris), *Les soulèvements populaires en France de 1623 à 1948*, S. E. V. P. E. N., Paris, 1963.
  - Ranum (Orest), *Paris in the Age of Absolutism. An Essay*. New York and London, John Wiley and Sons, 1968. “Les Parisiens du XVII<sup>e</sup> siècle” traduit par Georges Dethan, Armand Colin, 1973.